

I 宮崎市教育情報研修センター全体（国・算・英）研究主題

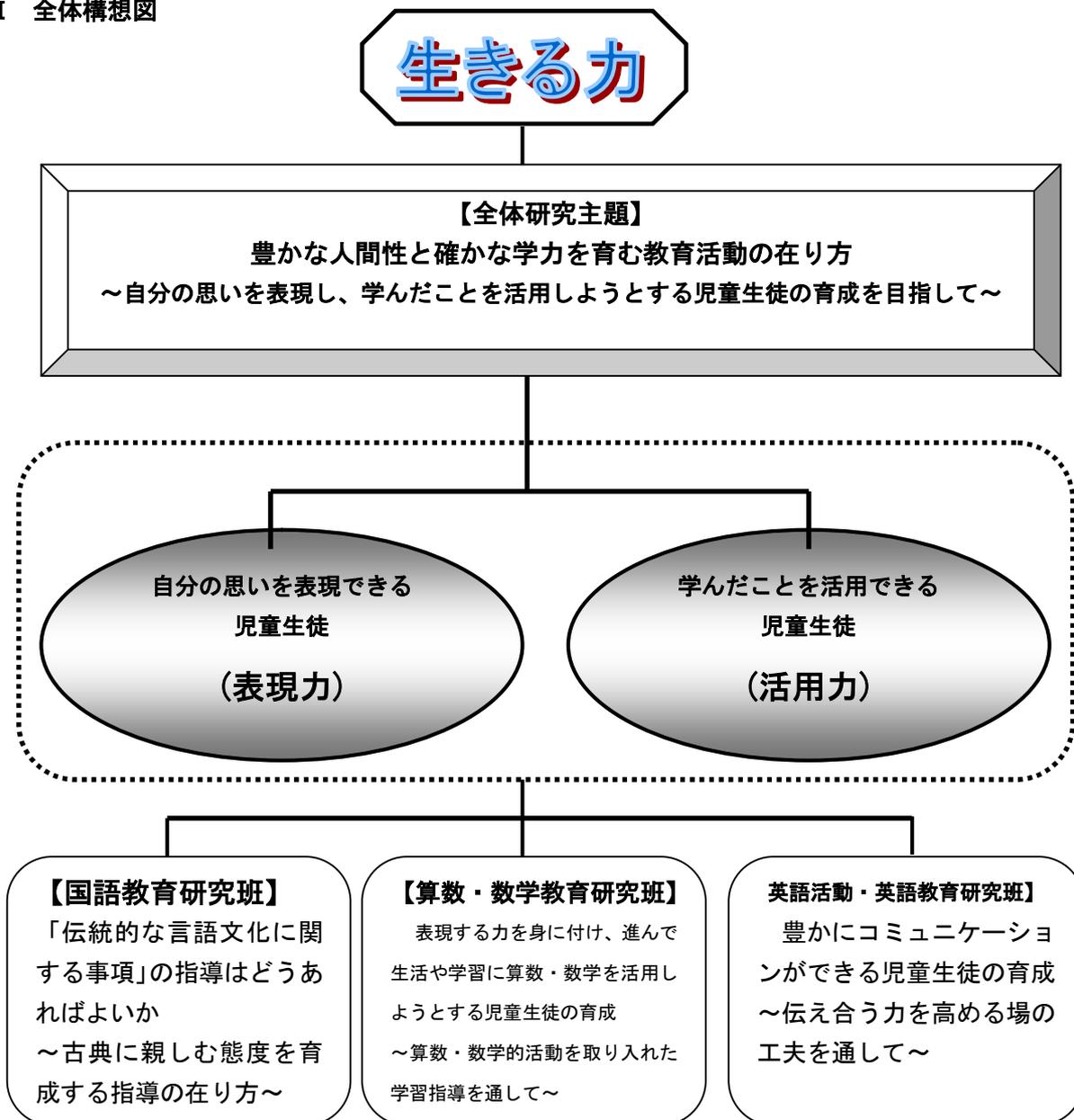
豊かな人間性と確かな学力を育む教育活動の在り方
～自分の思いを表現し、学んだことを活用しようとする児童生徒の育成を目指して～

II 全体研究主題設定の理由

これからの社会は、新しい知識や情報、技術等が、様々な社会活動の基盤として更に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」となりつつある。そのような中、教育現場では、「生きる力」の理念を継承しつつ、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等を調和的に育成する教育活動が求められている。

また、学力・学習状況調査等の結果から、子どもに知識・技能を活用する力(活用力)や自分の考えや思いを表現する力(表現力)をどのように育てていけばよいかが、今日の宮崎市の教育的課題としてとらえられた。そこで、「国語教育」「算数・数学教育」「英語活動・英語教育」について、どのような手立てをとればよいかを中心に、各教科等の特性を生かしながら研究を推進していきたいと考え、本主題を設定した。

III 全体構想図



国語教育研究班の取組

I 研究主題

「伝統的な言語文化に関する事項」の指導はどうあればよいか
～古典に親しむ態度を育成する指導の在り方の研究～

II 主題設定理由

本研究は、2か年計画2年目の実践研究である。本研究では、学習指導要領改訂に伴う新しい古典学習の先行研究として「子どもが古典に親しむとは？」を追究して来た。

1年目の研究においては、子どもが古典に親しむためには、古典が身近にある状態(環境)が大切であることが分かってきた。また、古典を声に出して読み、暗唱したりリズムを楽しんだりする活動が効果的であるということも検証できた。さらに2年目の研究では、宮崎の神話を活用した古典の導入、古典から学んだ知識の活用・表現について研究を進めてきた。

今回の学習指導要領改訂に至るまで、古典の教育には、多くの歴史がある。昭和22年学習指導要領では、中学校や高等学校の国語から古典教材が削除された。しかし、昭和44年学習指導要領で中学校国語に「古典に親しむこと」が位置付けられた。さらに、昭和52年学習指導要領では、小学校5・6年生に「古典の文語の調子に慣れること」が言語事項に位置付けられ、平成10年学習指導要領に引き継がれた。今回の改定で、義務教育9年間にわたり「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。これにより、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧・漢詩・漢文などの古典や神話・伝承、近代以降の文語調の文章に小学校から触れることになった。これらの学習を通して古典に慣れ親しみ、古典から昔の人の見方・感じ方を学ぶことが大切である。

古典学習の課題は、今後も「なぜ、古典を学ぶのか？」である。その答えを指導者が意識しながら、子どもと共に学習していく必要性を感じている。特に、古典と子どもの日常生活の間には、距離がある。二者の橋渡しこそが、宮崎市の学校教育における古典指導に求められている。

そこで、昨年度の古典の「音読」を軸にした古典指導の充実を図る指導を受け、本年度は、国語科の授業を軸に、学校生活や家庭生活、他教科での実践など、子どもが古典に親しむ視座に立って、子どもを取り巻く環境にある「古典」に研究課題をもち、実践に取り組んだ。本研究をきっかけに、学習指導要領改訂に伴った古典学習が実施される中で、子ども一人一人が古典に親しむことができるといった願いが、本研究の存在価値であると考えている。

今後は、宮崎市の児童生徒が学校図書館や市立図書館等で、多くの古典に触れ、授業で学んだ古典から俳句や短歌を作ったり、宮崎の神話を説明できたりするようになることを期待する。

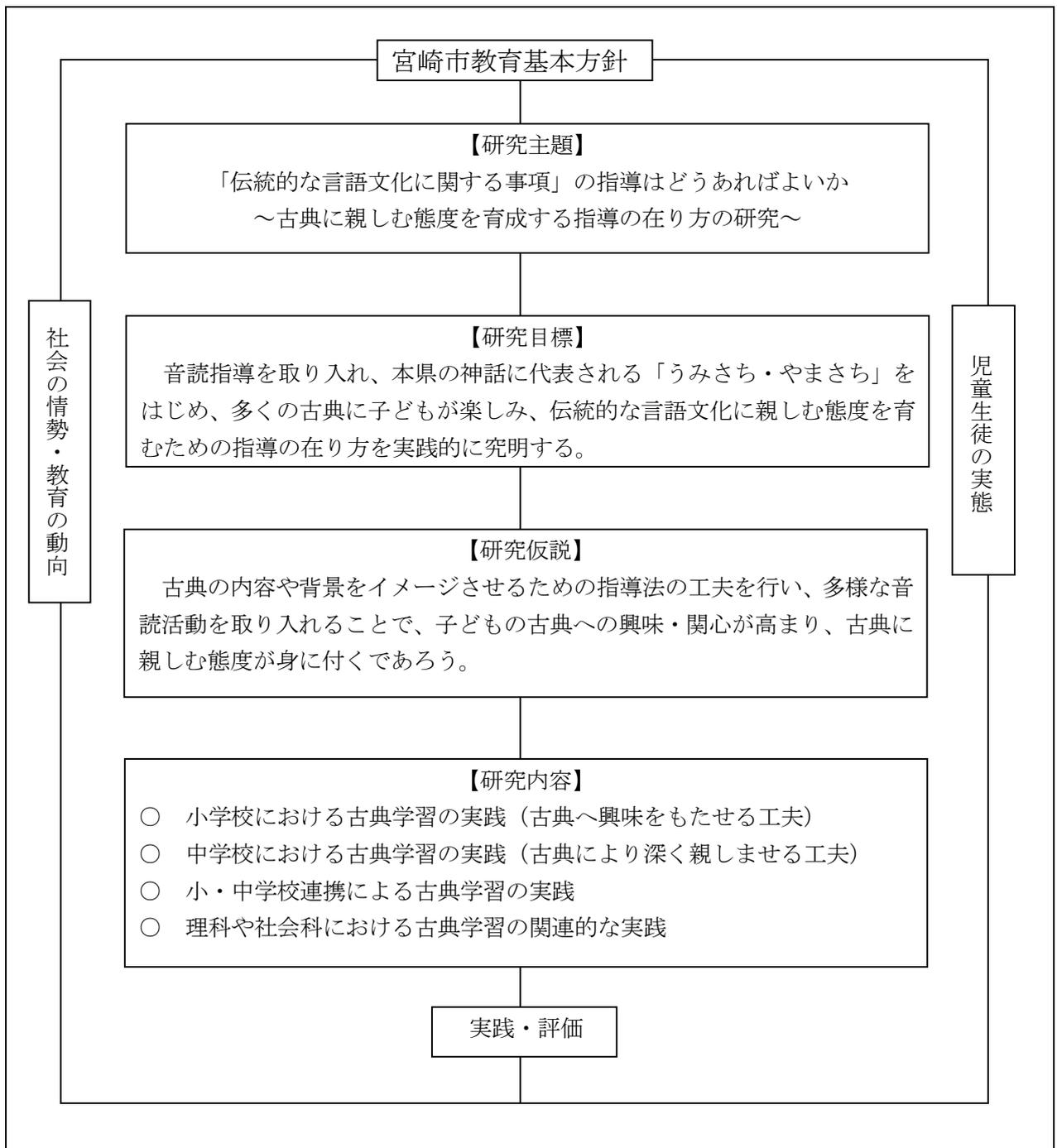
III 研究目標

音読指導を取り入れ、本県の神話に代表される「うみさち・やまさち」をはじめ、多くの古典に子どもが楽しみ、伝統的な言語文化に親しむ態度を育むための指導の在り方を実践的に究明する。

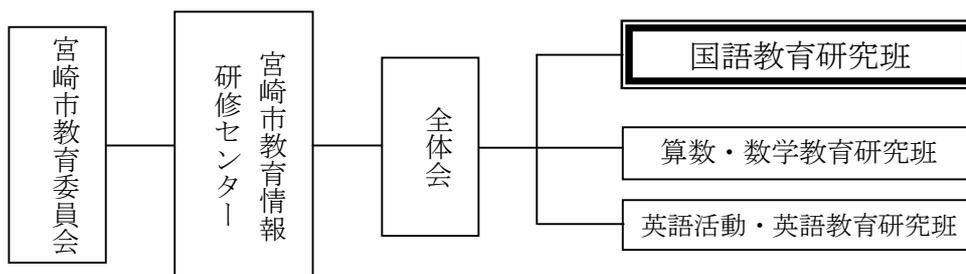
IV 研究仮説

古典の内容や背景をイメージさせるための指導方法の工夫を行い、多様な音読活動を取り入れることで、子どもの古典への興味・関心が高まり、古典に親しむ態度が身に付くであろう。

V 研究構想



VI 研究組織



Ⅶ 研究内容

学習指導要領改訂に伴い、「伝統的な言語文化に関する事項」が新設された。このことは、子どもが、わが国の歴史で継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、さらには、言語感覚を豊かにする中で、今後の継承や発展へとつながる存在であってほしいという願いが込められている。

そこで、伝統的な言語文化に小学生の低学年から触れ、中学校では、引き続き古典に親しむ態度を育成する指導方法の在り方について、音声言語を義務教育9年間の柱に据え、以下の4点について実践的に研究した。

- 小学校における古典学習の実践
- 中学校における古典学習の実践
- 小・中学校連携による古典学習の実践
- 理科や社会科における古典学習の関連的な実践

1 小学校における古典学習の実践

「古典の入口」である小学校低学年を中心とした実践研究に取り組んだ。古典を聞き、声に出して読み、声に出して表現することが、古典に親しんでいる子どもの姿であると考え。そこで、以下のように実践をした。

(1) 音読集の活用

国語科の授業等で音読集を活用し、伝統的な言語文化に慣れ親しませるようにした。必要に応じて作者や時代背景、作品の意味・思いなどを紹介し、子どもが作品により近づけるような工夫をして音読の指導を行った。指導にあたっては、昨年度の研究を受けて、教師の範読から追読みや句点読み、交互読み、動作をつけた読みなどを行わせ、最終的には暗唱をして発表するといった形をとった。



【道具を使ったペア読み】

(2) 古典に親しむ学習の手立て

子どもにとって、就学前や家庭などでの昔話の読み聞かせの経験には個人差がある。また、学校図書館の古典の貸し出し冊数も少なく、古典に親しんでいるとは言えない。

そこで、古典指導にあたっては、子どもが古典の楽しさ、面白さに気付くことができ、体全体を使って古典に触れられるような体験的な活動を多く取り入れていくことが重要であると考え、以下のような実践をした。

ア クイズを取り入れた活動

様々なものの写真を見せて何の昔話に関係があるものかを当てたり、昔話の場面絵だけを見てあらすじを語ったりする活動を行った。学習にクイズを取り入れたことで、子どもの古典に対する抵抗を減らし、楽しみながら活動することができた。

イ 実物投影機を使った読み聞かせ活動

本実践の教材である神話「うみさち・やまさち」に初めて触れる子どもも多かったため、実物投影機で絵本の場面絵を拡大したものをを見せて読み聞かせを行った。



【実物投影機の活用】

大きな場面絵を見ながら話を聞くことは、子どもの興味を高め、言葉だけでなく視覚にも訴えることができ、効果的だった。

ウ 多様な音読法の実践

本実践では、「うみさち・やまさち」の導入部を取り扱った。子どもが初めて触れる神話を楽しめるよう、様々な方法で音読活動を行った。子どもの興味を持続させるために、海幸と山幸に役割を分け、教師と子ども、グループとグループ、個人と個人など、形態を変えて音読した。また、子どもの意欲を高め、楽しみながら活動を進めていくために、釣り針や弓矢などの小道具を使ったり、台詞に合わせて身振りをつけたりしながら音読を行った。

(3) 家庭学習の工夫

古典学習への興味・関心を持続させるためには、学校だけではなく、家庭での活動も必要になってくる。そこで、毎日の家庭での音読に、国語の教科書のものだけでなく、古典的なものを取り入れた。小学校低学年では、「うらしまたろう」「いっすんぼうし」等のよく知られる昔話の冒頭や、授業で扱った「うみさち・やまさち」等の神話の冒頭の音読を行うようにした。家庭での課題とすることで読書の幅が広がり、学校図書館等での古典作品の利用が高まると考えられる。

2 中学校における古典学習の実践

中学校国語では、今回の改訂で、「読むこと」の配慮事項に示されていた古典の指導から「伝統的な言語文化に関する事項」に設定された。また、小学校から系統的に「伝統的な言語文化に関する事項」が設定されており、中学校でのより一層、古典に親しむことや言語文化への関心の広がりや深まりを求められた実践研究をした。

(1) 音読指導の工夫

本研究会では昨年度作成した「宮崎市小中学校古典音読集 『うみさち・やまさち』」を授業で活用していく計画を立案した。中学校では以下のような計画をたて、月ごとに音読する作品を決めて活動を行っていった。

音読活動は毎授業時間の開始後5分間に位置付け、それぞれの月ごとの課題の音読練習を行わせた。音読活動を行うに当たっては、「追読」「句読点読み」「句点読み」「交互読み」「暗唱」など、形態を工夫しながら練習をさせていった。毎授業時間必ず数回は音読を行うため、授業でその単元を学習する時には既にすらすらと音読できる状態になっており、古典の理解を深めていくのに役立った。また、練習を重ねていくうちにかなりの子どもが自然に暗唱できるようになり、音読集から目を話して声に出す姿も見られるようになった。

	1年	2年	3年
9月	P16「いろは歌」 「お伽草子」	P20「枕草子」	P25「万葉集」 「古今和歌集」
10月	P11「竹取物語」	P15「平家物語」	P24「古今和歌集 仮名序」
11月	P18「矛盾」	P19「方丈記」 「徒然草」	P26「新古今和歌集」
12月	P12「百人一首」	P22「春望」	P21「おくのほそ道」 「謡曲」
1月	P17「土佐日記」 「源氏物語」	P21「おくのほそ道」 「謡曲」	P23「論語」

【昨年度研究員作成による音読集を活用した音読活動計画】

(2) 古典学習を深める指導方法の工夫

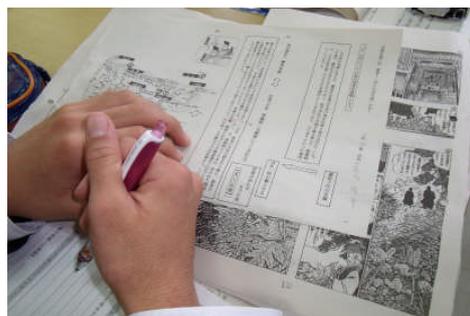
古典のリズムを子ども達自身に感じ取らせるために、学習のはじめに毎時間冒頭部分を「交互読み」「追いかけ読み」「ペア読み」などの音読を繰り返して行った。古典の独特のリズムを音声として刻んでいくことによって、古典をすらすらと読めるようになる。このことが、古典に親しむ、古典を楽しむ第一歩となると考え実践した。

また、本単元「古典を楽しむ 夏草～『おくのほそ道』から～」の目標である「『おくのほそ道』をとおして、作者の生き方や考え方について興味・関心をもって取り組むことができる」や、「芭蕉のものの見方や考え方について、自分なりに表現することができる」を達成するためには、作者の生涯や時代背景といった基礎的知識を大切にする必要がある。この時代に生きた人間の心情をより深く味わわせるために、作者の生涯や当時の時代背景など基礎知識

に触れた。ここでは、「おくのほそ道」の旅程図、奥州藤原時代の平泉の様子が確認できる参考資料を提示した。さらに、子どもにテーマとして提示した「高館訪問に際して『時のうつるまで涙を落としはべりぬ』から、芭蕉が感じた気持ちを話し合う」という活動を実践するために、芭蕉が訪れた平泉の場面をイメージできるように図書資料を提示する工夫を行った。



【音読の時間の様子】



【補助資料】

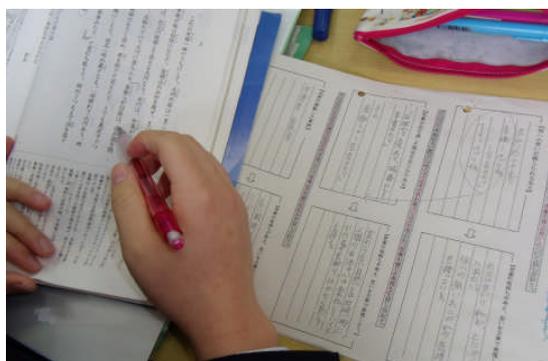
(3) 古典から自分を見つめさせる指導方法の工夫

グループ学習を行う上で、自分自身の意見をもって話し合い活動に入ることができるように、事前にそれぞれのテーマについて自分の意見をもつための時間を設けた。芭蕉の気持ちや考え、思いが感じられる部分を本文から抜き出させ、そこから感じ取ったことを文章表現させるワークシートを作成した。

また、話し合い活動の場面では、班長を中心に自分の意見を発表させ、他の意見と自分の意見を比較することで自分の考えを深めさせた。個人で考えたことを、比較、確認しながら話し合いを深めていく活動は、古典の世界に親しむ態度を養うと考える。さらに、子ども自身が自分なりに解釈するために思考してきた過程を、自らの言葉で表現させることにより、古典に描かれている作者の思いにふれ、自分自身を振り返ったり見つめたりする活動ができた。



【グループによる話し合い】



【ワークシートへの記入】

3 小・中学校連携による古典学習の実践

昨年度実施したアンケートでは、小学校教師が「伝統的な言語文化に関する事項」の指導について、不安を感じている傾向が見られていたため、小学校の授業では、これまでも古典の学習指導を行ってきた中学校国語科教師とのTTが組めると有効であると考える。

【小学校第5学年】

1 教材 「竹取物語（冒頭）」

2 本時の目標

- 「竹取物語」のおもしろさを感じとり、古典文学に対する興味・関心をもつことができる。
- 物語の意味を考えながら、歴史的仮名遣いに注意して、音読することができる。

3 授業の実際

本授業は子どもが古典文学のおもしろさや音読することの楽しさを味わうことをねらいとしている。初めて出会う古典文学に抵抗なく親しめるよう、本授業では子どもになじみのある「かぐやひめ」の原文である「竹取物語」を題材として扱うこととした。さらに、中学校教師とのTTで学習をすることで専門的な立場からの説明を加えるとともに、中学生になってからの古典学習への見通しと興味をもたせ、古典学習への期待をもたせるようにした。

4 学習指導過程の概要

学習内容及び学習活動	指導上の留意点		資料・準備
	T 1(学級担任)	T 2(中学校国語科教員)	
1 「かぐやひめ」について知っていることを話し合う。	○ 「かぐやひめ」の物語は、「竹取物語」がもとになっていることを確認する。	○ 「竹取物語」が日本最古の物語であることなどの補助的な説明をする。	絵本 「かぐやひめ」
2 「竹取物語」の範読を聞く。	○ 原文の特徴を考えさせ、現代語との違いを感じさせる。	○ 「竹取物語」原文に出てくる歴史的仮名遣いについて簡単に説明する。	提示用原文 場面絵 現代語訳 プリント
3 音読の練習をする。	○ 最初に教師主導で音読練習をし、徐々に子ども主体による音読へ移行する。その際、机間指導を行い、子ども達の読みの確認と励ましをする。	○ 音読・暗唱が古典を讀解すること上で大切であることを説明する。その際、暗唱できるようになることを意識させながら音読指導をする。	チェック表
4 音読発表会をする。	○ 子どもの頑張りを認め、称賛する。		
5 本時のまとめをする。	○ 本時の感想を発表させ、まとめを行う。	○ 中学校での国語の授業について、今後の古典学習への意欲を高める。	自己評価カード

5 評価

- ア 古典作品への興味・関心をもつことができたか。
- イ 歴史的仮名遣いに注意して、大きな声で音読することができたか。

4 理科や社会科における古典学習の関連的な実践

古典とは、子どもにとって、どんな存在なのか？多くの子どもは、国語科学習の中でも、特別な存在と感じている。子どもにとって「古典」は、図書館で手に取って選ぶ本ではないようである。つまり、多くの子どもにとって「遠い存在」であると言える。

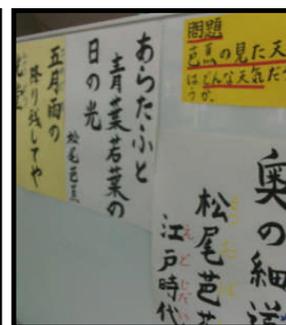
そこで、次のような関連的な実践をした。本実践は、ハーバード大学のワード・ガードナー氏が提唱する「マルチプル・インテリジェンス理論」（和訳「多重知性」）を参考にしたものである。小学校で、「古典」を「マルチ」にとらえ、国語科領域外からも、子どもが古典に親しむ実践を行ってみた。教科は、理科と社会科からのアプローチである。古典を自然や歴史といった観点から多角的多面的にとらえ、他教科で得た知識を国語科学習で活用し、子どもにとって、「古典」をより身近な存在にすることをねらった。

(1) 理科から古典学習へのアプローチ

理科6年生「月と太陽」では、俳句と短歌を単元導入に提示し、歌から与謝蕪村と柿本人麻呂がどんな月を見たのか追究した。また、5年生「天気の変化」では、単元終末に知識の活用として、「奥の細道：松尾芭蕉」の俳句から芭蕉の見た天気を追究した。両実践とも、伊藤一彦氏による文学の解説の補助を得ながら、5・6年生の国語科学習



【6年：月と太陽】



【5年：天気の変化】

「古典」へと「マルチ」な関連を図る学習例である。このような理科でも古典にふれることを通して、月や太陽などの天体に対する興味・関心や豊かな心情をもつことができるようにした。

(2) 社会科から古典学習へのアプローチ

社会科では、平安時代に藤原道長が詠んだ「この世をば わが世とぞ思ふ もち月の 欠けたることも なしと思へば」の短歌を学習する場面で、国語科への関連を図った。教科書で扱った藤原道長の短歌は漢字と平仮名の混合で、平仮名は漢字を崩して作られ、片仮名は漢字の一部を省略して作られたものという解説が添えられている。子どもたちは、ここで国風文化に触れ、今まで使っていた平仮名・片仮名の成り立ちや歴史に興味をもつことができ、古典に親しむことができる。学習後に小倉百人一首を使ってカルタ遊びをし、作者の気持ちや独特の世界観にふれた。さらに、国風文化の栄えた時代の人物（藤原道長や紫式部など）を取り扱った本を学級文庫に置いたり、「源氏物語」や「枕草子」「平家物語」などの文学作品を紹介したりして、より古典に親しむ態度を育てる工夫をした。



【百人一首の様子】

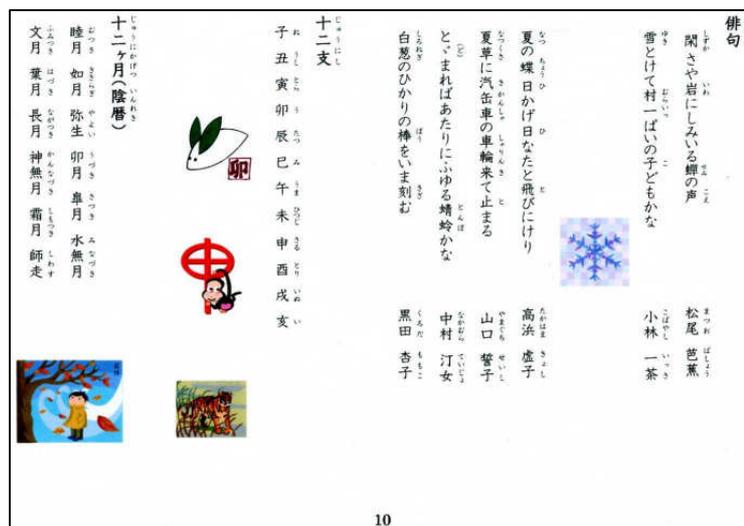
古典には、社会的事象や自然現象を表現した作品がある。社会的事象の視点からとらえると社会科の範囲でも学習したり、自然現象の視点からとらえると理科の範囲でも学習したりする。子どもを、国語科以外の領域でも古典にふれさせ、古典に親しませることができると考える。

VIII 成果と課題

「古典に親しむ態度を親しむ指導の在り方」について2年間研究してきた研究の成果については以下の5点が挙げられる。

① 古典に関する音読集の活用

子どもの発達段階を考慮した古典の音読集を作成し、その活用について研究をした。小学校では、朝の会や帰りの会の音読タイム、家庭での音読活動などの場面で活用した。また、中学校では、国語科学習において音読の時間に活用した。子どもは、繰り返し古典を音読することにより、すらすら読めるようになり、古典の面白さを味わうことができた。



【音読集「うみさち・やまさち」の一部】

② 多様な音読活動

音読活動は、古典のもつリズムを味わったり、作品の情景や人物の心情についてイメージを膨らませたりする上で重要である。このことは、昨年度の研究で実証されており、本年度でも小・中学校国語科学習で子どもが積極的に取り組む姿が見られた。

③ 小学校低学年での、郷土資料の活用

郷土に伝わる「うみさち・やまさち」を資料とした授業を行ったことで、子どもが、古典をより身近に感じることができた。小学校低学年から古典に親しませることで、子どもが地域に伝わる行事に関心を持ったり、自ら古典の本を手にとって読む機会が多くなったりした。

④ 実物投影機などのICTの活用

音読指導にあわせて、視覚的な補助として、プロジェクターや実物投影機を活用した。学習におけるICT機器の活用の有効性については、多くの研究から実証されている。本研究でも古典に関するクイズや読み聞かせなど楽しみながら活動する子どもの姿が見られた。



【実物投影機の活用場面】

⑤ 国語科学習以外の教科指導における古典への関連指導

古典は、自然現象や社会的事象を文学的に表現したものである。国語科の学習以外でも古典にふれる機会を設けることで、子どもの古典への興味・関心が高まることが検証できた。

「古典に親しむ」研究は、今までも日本各地で実践されてきている。本研究は、先行実践を参考に学習指導要領改訂に伴う新しい古典学習を研究とした。その結果、今後の課題も明確になった。そこで、今後の展開例として、次の3点を課題として挙げる。

① 国語科年間指導計画の整備や充実

小・中学校国語科学習指導要領の各事項「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の全領域に立脚した指導計画を立てる。その際、義務教育 9 年間で子どもが古典を学習することを念頭に置き、自校のみならず、小学校から中学校への接続を意識した指導計画が必要である。

② 読み聞かせなど古典に親しむ機会の設定

古典の文章は、現代語と違い、子どもにとっては意味がわかりにくく、親しみが少ない。そこで、著作権の侵害にならない範囲での音読集の作成・活用を図りながら、音読による指導を重視し、繰り返し古典のリズムに慣れさせていくことが大切である。また、読み聞かせや家庭学習(読み声)を活用したり、音読発表会などで表現させたりなど意図的・計画的な指導計画が必要である。

③ 古典の指導方法に関する研修機会の設定

昨年度の研究により、小・中学校教員に古典学習の指導についての意識調査を実施した。その結果、特に、小学校教員自身の古典への精通さや古典指導方法の充実などに不安を抱えていることが分かった。そこで、具体的な指導方法など、古典指導に関する研究を伝達する研修の機会を設け、指導の充実を図る必要がある。そこで、本研究員による模擬授業を活用した伝達 や VTR を活用した授業視聴による学習指導方法の研修など、様々な形で小・中学校教員が学ぶ機会を今後、設けていくことが必要である。

引用・参考文献

小学校学習指導要領解説 国語編 (平成 20 年 8 月) 文部科学省
中学校学習指導要領解説 国語編 (平成 20 年 9 月) 文部科学省
宮崎市教育情報研修センター平成 20 年度研究紀要第 52 号 (平成 21 年 3 月)
教育科学 国語教育 8 月号 (平成 8 月 1 日) 明治図書

研究同人

所 長	湯元 安男	指導主事	高森 賢一
指導主事	岩永 律子		
研 究 員	興梠 大輔 (小松台小学校)		下村 晴美 (赤江中学校)
	島田 友輝 (大宮小学校)		永山 章子 (大宮中学校)
	西田 剛人 (潮見小学校)		西原 浩子 (櫛中学校)